

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

長安のライチ (長安的荔枝 / The Lychee Road)

2025年 / 中国映画
配給: Stranger、面白映画 / 122分

2026 (令和8) 年1月20日鑑賞

テアトル梅田

Data

2026-4

監督・脚本: 大鵬 (ダーボン)

原作: 馬伯庸 (マー・ボーヨン) 『長
安の荔枝 (ライチ)』

出演: 大鵬 (ダーボン) / 白客 (パ
イクー) / 庄達菲 (ジュア
ン・ダーフェイ) / 劉俊謙 (テ
レンス・ラウ) / 劉徳華 (ア
ンディ・ラウ) / 楊冪 (ヤン・
ミー) / 常遠 (チャン・ユエ
ン)

👁️👁️ みどころ

本作のタイトルとなっている「ライチ (荔枝)」とは、時々口にするあの美味しい果物のことだが、『長安のライチ (荔枝)』とは一体ナニ？

私が小学生の頃はバナナを口にするのも稀だったが、いくら玄宗皇帝の愛妾・楊貴妃が生地のライチが好きだと言って、も、クール宅急便などなき8世紀の唐の時代、生のライチを嶺南から運んでくるのは到底不可能！！そう思うのは当然だが、実は・・・？

大鵬 (ダーボン) 監督、脚本、主演の本作は、史実に基づく馬伯庸 (マー・ボーヨン) の小説『長安の荔枝 (ライチ)』を映画化したもの。知らなかったナア！そう言われると、本作は必見！

下級官吏の主人公が長安でマイホームを入手する姿と宮廷内の権謀術策の中で「ライチ使」に祀り上げられていく姿は興味深い。また、誰が考えても達成不可能と思われる任務に果敢に挑む主人公の姿は感動的だ。それを前提として、本作後半のハラハラドキドキの「80日間世界一周」ならぬ、「11日間でのライチ輸送計画」の敢行ぶりを楽しみたい。

そして、本作ラストでは大鵬監督が描こうとした本作のテーマが何なのかをしっかり考え、胸の中に刻み込みたい。

— * — *

■□■ライチ (荔枝) とはあの果物のこと？本作は一体ナニ？■□■

本作のタイトルとされているライチ (荔枝) とは、最近よく食べられている、あの美味しい (南国産の) 果物のこと？Wikipedia でレイシ (荔枝) を調べると、「レイシ (荔枝、学名: Litchi chinensis) はムクロジ科レイシ属の果樹。特にその果実はライチと呼ばれる。1属1種。中国の嶺南地方原産。バンレイシおよびバンレイシ科は目レベルより上で異なる

る別種である。」と解説され、さらに、

常緑高木で、葉は偶数羽状複葉（2・4対の小葉からなる）で互生する。花は黄緑色で春に咲く。果実は夏に熟し、表面は赤くうろこ状（新鮮な物ほどトゲが鋭い）、果皮をむくと食用になる白色半透明で多汁の果肉（正確には仮種皮）があり、その中に大きい種子が1個ある。

と解説されている。さらに、

中国においては紀元前から南方の温暖な地域において栽培されていた果樹で、上品な甘さと香りから中国では古来より珍重されたが、保存がきかず「ライチは枝を離れるや、1日で色が変わり、2日にして香りが失せ、3日後には色も香りも味わいもごとごとく尽きてしまう」と伝えられる。唐の楊貴妃がこれを大変に好み、華南から都長安まで早馬で運ばせた話は有名である。

と解説されていたから、ビックリ。しかし、『長安のライチ（荔枝）』とタイトルされた本作は一体何の映画？

■□■さすが長安！さすが中国！こんな歴史、こんな物語が！■□■

長安はかつての唐の都。唐の玄宗皇帝とその愛妾・楊貴妃の物語は日本でも有名だが、それと共に「安史の乱」とそれによって生まれた楊貴妃の悲劇、という“史実”も有名だ。

私は2001年8月に昔からの夢だった西安旅行に出かけたが、そこではしっかり「華清池」を見学し、玄宗皇帝と楊貴妃が過ごしたためくるめく別荘地における愛の日々を追想した。ところが、そんな私でさえ、上記の「唐の楊貴妃がこれを大変に好み、華南から都長安まで早馬で運ばせた話は有名である。」ことを知らなかった。

しかし、本作はそれを映画化したものだと知ってビックリ！今までそんな話題を聞いたこともなかったが、平日にもかかわらず本作の観客の入りは7～8割だからそれにもビックリ。

■□■宮崎県新富町ではふるさと納税で「楊貴妃ライチ」を！■□■

本作のタイトルとされている「ライチ」についてさらに調べてみると、一般財団法人こゆ地域づくり推進機構（こゆ財団）の『毎日300個食べられるならこのままでよくね？』中国の詩人たちのライチ愛がスゴい・宮崎県新富町ふるさと納税』のサイトを発見！そこでは、

「世界三大美女の一人とされる中国の楊貴妃。彼女がライチがこよなく愛したというエピソードから、楊貴妃ライチというブランドをつくりまして…」

宮崎県新富町の特産品であるライチについて、これまでいろんな方にこんな説明をしてきました。楊貴妃は、ライチがあまりに好きすぎて、遠方に早馬を走らせてまで取りにいかせたという話。その魅力や何をかいわんや、ですよ。遠方といっても数十キロとかではなく、およそ1300キロ。宮崎から東京までを車で

走るとほぼ同じですが、現代なら飛行機でスパッと1時間半のところを、当時は馬です。馬ですよ。

さて、その一方でボンヤリ気になっていたのは「そんなに魅力的なら誰か他にも過去に触れている人がいるのでは？」ということ。

調べてみたところ、ありましたありました。ハマっていたのは日本の漢文の教科書にも載っているような、超有名な中国の詩人たち。ライチファンはやはり楊貴妃ではなかったのです。今回はそれについてご紹介しましょう。

と書かれていた。

また、そこで解説されていたのが、白居易と蘇軾の詩だ。すなわち、白居易の『長恨歌』として、

嚼疑天上味 嗅異世間香

潤勝蓮生水 鮮逾橘得霜

(超意訳)

食感もかほりももうこの世のものとは思えませんのよ。

果汁もすごいし実の色もマジ最高。やばいよね。

…とライチのことを絶賛しています。当代きっての詩人がわざわざライチについてここまで書き残しているってすごくないですか？ しかも、白居易は他の詩で「ライチが日持ちのしない果物である」ということもわざわざ書いてくれています。よほど好きだったことが想像できます。

が紹介され、蘇軾の『食荔枝』として

羅浮山下四時春 盧橘楊梅次第新

日啖荔枝三百顆 不辭長作嶺南人

(超意訳)

このあたりはポカポカで超きもちいいし梅もあるし

毎日ライチ 300 個食べられるならこのままでよくね？

…どうですか。政争に敗れた流罪の身でありながら、このキモの座り方。さすがにライチを毎日 300 個も食べていたかどうかはわかりませんが、「ライチを食べて過ごせるならここに住み続けてもいいよね」なんて思っていたとはまったく驚きです。ライチは皇帝への献上品としても用いられたそうですから、そんな貴重な果実をとことん食べ尽くすことのできる環境は、蘇軾にとって(流罪の身なのに)天国のようでもあったのかもしれません。

が紹介されていた。唐の時代の長安で、ライチがこんなに話題にされていたとは！！

■□■原作は？主人公は？ストーリーは？■□■

私は『SHOW・HEY シネマルーム』を 58 巻まで、そのうち中国映画特集を 5 巻まで出

版しているから、「中国映画には相当詳しい」と自負していたが、それでも、馬伯庸（マー・ヨーボン）の小説『長安の荔枝（ライチ）』やそれを原作とした本作を全く知らなかった。また、作家・馬伯庸の小説は相当有名で、とりわけ『長安十二时辰』（16年）は小説も映画も大人気を博したそうだが、それすらも知らなかった。

チラシによれば、本作の主人公とそのストーリーは次のとおりだ。

唐の都・長安。下級官吏として働く李善徳にある日、皇帝から運命を左右する命令が下る。「遙か南方・嶺南の新鮮なライチを長安へ届けよ」。ライチはとても傷みやすく、嶺南から数千キロ離れた長安へ無傷で届けることはほぼ不可能。成功すれば出世の道、しかし失敗すれば命の危険が一。

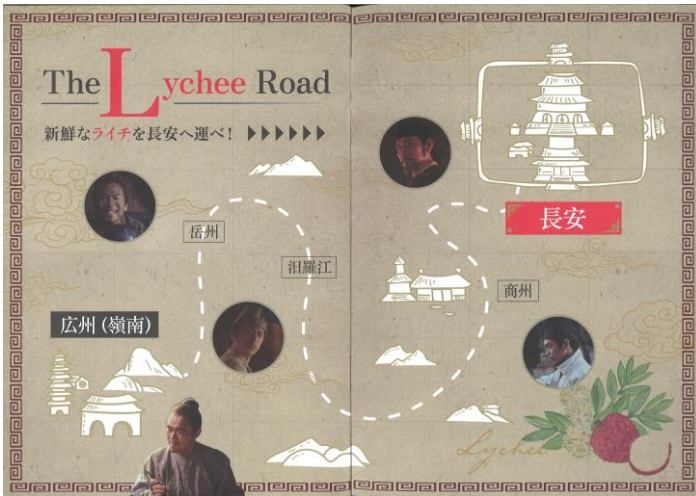
同僚の策略により、無理難題な“ライチ使”に任命されてしまった李善徳は嶺南へ向かい、ライチ農園の長の娘、計画に投資する商人、奴隷として虐げられていた青年をはじめ、思いも寄らぬ仲間たちと手を組むことに。刻一刻と迫る納期、腐りやすい果実、そして宮廷に渦巻く官僚達の泥沼の権力闘争。数々の逆境のなか、歴史を揺るがす前代未聞の“ライチ運送計画”が今、幕を開ける！

21世紀の今でこそ「クール宅急便」のシステムが完備しているが、私の小学生時代は台湾から輸入されたバナナを食べることさえ困難だった。したがって、8世紀当時の、玄宗皇帝が治める唐の時代に、いくら愛妾の楊貴妃がライチを好んだとはいえ、それを生で食べていたとは到底考えられない。すると、本作は SF タッチのまがいもの！いやいや、それでは馬伯庸の原作小説が生まれるはずはないし、大鵬（ダーボン）監督が監督、脚本、主演してまでそれを映画化するはずはない。そう思っていると、本作冒頭、とんでもない宮廷内の策略の中で、主人公の李善徳（大鵬／ダーボン）が無理難題な“ライチ使”に任命されてしまうことに！さあ彼はどうするの？

■□■唐の統治・官僚システムに注目！権限は？やる気は？■□■

本作導入部では、複雑極まりない唐王朝内の統治・官僚システムの中で、突如「ライチ使」に任命されてしまう李善徳の姿に注目！また、それに続く本作前半では、そんな理不尽な状況に置かれたにもかかわらず、李善徳がその任務を達成するために腹をくくり、最大限の努力を繰り返していき姿が描かれるのでそれにも注目！

何らかの仕事をするためには、まず現場を確認！それが何よりも大切だから、妻・鄭玉婷（楊露／ヤン・ミー）との別れを告げた李善徳は、まず長安から約5000里（約2500km）離れた、ライチの産地である嶺南（広州）までの道を旅することに。パンフレットによれば長安から嶺南までの“The Lychee Road”は、次のとおりだ。



嶺南に到着し、ライチの木を確認し、蘇諒（白客／パイカー）、阿僮（庄達菲／ジュアン・ダーフェイ）、林邑奴（劉俊謙／テレンス・ラウ）等の協力を取り付けながら、さまざまな輸送手段を練りに練った李善徳は再び長安に戻り、宰相の楊国忠（劉徳華／アンディ・ラウ）に真正面から自らの計画書を提出し、あくまで唐の統治・官僚システムの中での“決済”とそれに必要な“予算の支出”、そして“権限の委譲”を求めたから、すごい。こんな姿をみていると、彼は一方ではライチを幹ごと運ぶ等の工夫によって生ライチの保存期間を最大限延長し、他方では嶺南から長安までの生ライチの輸送日数を最大限縮めるための方策を練りに練っているから、まさに本気で“やる気”を示していること明らかだ。

■□■大鵬監督の視点に注目！主人公の執念に感服！なるほど！■□■

2025年の今、日経平均株価は約5万3000円と1989年当時の最高価格3万8915円を大幅に超えている。また、東京の不動産マンション価格は中古でも1億円を超え、1989年当時の土地バブル絶頂期の価格を大きく超えている。さらに、高市内閣の「責任ある積極財政」の下、株高、円安と同時に長期金利の上昇が続いているから、住宅ローンの借り主は大変だ。

本作の主人公・李善徳は地方から都に出て、科挙に合格して、中央官庁の下級役人になったのだから、数字と計算は得意。そのため、地価高騰が続いている唐の都・長安でも、就職後10年余で住宅ローンを活用して郊外に戸建ての家を購入したのはさすがだ。本作導入部では、彼のそんな一面も描かれるので、それにも注目！

中国経済新聞の「映画『長安的荔枝』、興行収入4.39億元突破—馬伯庸（マーボーヨン）作品、映像化ブーム続く」のサイトによれば、「■唐代の小役人に現代人が共鳴」に続き、「■職場風刺コメディの系譜として」のテーマで、次のとおり紹介されている。すなわち、

本作の主演陣は、2023年の年末に公開され、職場を舞台にした風刺コメディ『年会不能停！(Johnny Keep Walking!)』とほぼ同じメンバーで構成されている。

大鵬（ダーボン）、白客（バイ・クー）、庄達菲（チャン・ダーフェイ）の三人組が、今回は時代劇という形で再集結した。

両作に共通するのは、職場の不条理や理不尽な上下関係への鋭い風刺であり、時代背景こそ異なれど、核心は現代社会に対する批判とユーモアにある。特に『長安的荔枝』（The Litchi Road）の冒頭では、真面目に働き続ける主人公の姿に、多くの観客が自分自身を重ね、「1000年以上前の話なのに、今と変わらない」と苦笑まじりに共感する声も多い。

なるほど、なるほど。本作導入部から本作前半の面白い展開をみていると、この解説に100%納得！

もっとも“ライチ使”の任務を達成するためには、唐の統治・官僚システムの中で“ライチ使”としての絶大な権限と莫大な予算を獲得し行使することが不可欠と考えた李善徳は、宰相の楊国忠から見事にその権限の委譲を受けた上で、本作後半の、「80日間世界一周」ならぬ「11日間での生ライチ輸送作戦」を決行するので、上記の問題意識をしっかりと頭に叩き込んだ上で、その一大エンタメ抗争劇をしっかりと楽しみたい。

■■■李善徳のキレっぷりに注目！詩人・杜牧の詩にも注目！■■■

本作後半では、李善徳の計画の成功の可能性が見えてくると、それを妨害したり、その成果を横取りしようと悪辣な手段を弄してくる輩が次々と登場！「この世の不条理」を象徴する姿がさまざまな形で登場してくるので、それにも注目！誰もが不可能と考えたライチ輸送計画は李善徳の手によってひょっとして成功するの？そんな状況下、何と李善徳もその友人たちも命の危険にさらされてしまうので、本作後半ではそんな激動の展開をしっかりと楽しみたい。そんな激動を経て、たった一騎の白馬が埃を巻き上げながら長安の都に入っていく姿は感動的だ。これによって、誕生日に生ライチを口にすることができた楊貴妃が満足したのは当然だし、そんな愛妾の姿を見た玄宗皇帝も、それを支える宰相の楊国忠も大満足したのは当然だが、たったそれだけのために五千里に及ぶ道のりの中で、多くの民が命を落としていっいの？楊貴妃が口にした数粒の生ライチは犠牲となった多くの庶民たちの血と涙の象徴であることを、楊貴妃や玄宗皇帝そして宰相はわかっているの？本作ラストのクライマックスでは、ついにキレてしまった李善徳が宰相に向かって大見得を切る姿が登場するので、それに注目！

他方、中国経済新聞の「映画『長安的荔枝』、興行収入 4.39 億元突破—馬伯庸（マーブロン）作品、映像化ブーム続く」のサイトには、唐代の詩人・杜牧（ト・ボク）の「長安回望繡成堆，山頂千門次第開。一騎紅塵妃子笑，無人知是荔枝來。」の詩の解説があるので、それをしっかりと味わいたい！この詩の意味は次のとおりだ。

長安を振り返れば、錦のような宮殿が幾重にも連なり、
山の頂にはいくつもの門が、次々と開かれていく。
一騎の馬が塵を巻き上げて駆け入ると、楊貴妃は微笑む。
けれど誰も知らない——その笑顔の陰に、ライチが運ばれてきたことを。

2026（令和8）年1月23日記